説教要旨「神に仕え、人に仕え」

ルカによる福音書　２章４１～５２節

聖書の時代のユダヤ人は、１３歳になると成人と見なされました。１２歳というのはその直前、いよいよ来年からは自立した大人のイスラエルの民としてこの祭に来ることになる、という時です。親の側から言うならば、子供を育てていく責任における最後の年、ということになります。

わたしたちは、成人する、大人になるということを、自分で生活費を稼いで、自立した生活を築くことだと考えています。たしかにそれは社会で生きていく上で必要なことです。しかし、この１２歳のイエス様の姿に示されているのは、自分が神様の保護下にあることを自覚すること、それが成人することなんだということです。

いなくなったイエス様を神殿の境内で見つけた母マリアは、「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです」。と叱りますが、イエス様は「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」と答えました（48 節）。マリアは、夫ヨセフのことをイエス様の父として話しているのに対して、イエス様が「私の父」と呼んでいるのはこの神殿の主である神様です。両親にしてみれば、イエス様はまだ成人していない未熟な子どもで、自分たちが保護する対象でした。しかし、子どもから大人になろうとする１２歳のイエス様は、自分が両親の保護下ではなくて、父なる神の保護下にあることを自覚し、自立した大人として歩み出されたのです。それはある意味で、この世の両親の下を離れて、本当の父である神様に従って生きる者となるということです。

わたしたちも、父なる神の保護下に生きています。本当にたくさんの恵みを、すべてのものを与えられて生かされています。このことを自覚したとき、本当の意味で自立した者として歩み出せるのです。イエス様の父である神様を、自分の本当の父として仰ぎ、仕え、そしてイエス様がなさったように、家族や隣人に仕えていく歩みへと、送り出されて参りましょう。

（２０２２・１・２　説教者：稲垣真実）